

論文の内容の要旨

論文題目 パラドクサル・フーガ
定位されざる逆説的遁走 —ビルヒリオ・ピニェーラと
レイナルド・アレナスの長編小説における「弱い」身体の政治性—

氏名 山辺 弦

本論文は、ビルヒリオ・ピニェーラ（1912-1979）とレイナルド・アレナス（1943-1990）という二人のキューバ作家の長編小説を対象とする比較研究である。具体的には、ピニェーラが生前残した三つの長編小説と、アレナスの自伝的五部作「ペンタゴニア」を比較対象とすることで、文学作品における明示的あるいは潜在的な政治的批判性を考察していく。

ともに六十年代および七十年代におけるキューバ革命政権下の抑圧的な文化政策によって周縁化され、現在ではキューバ文学史内での正典化をめぐる対照的な扱いを受ける両者だが、その長編作品の主人公には、抑圧的状况に直面した際に絶えず周縁へと逃れていく共通の運動が観察される。「怖れ」を抱く身体を動力としてもたらされる彼らの逃走は、その身体が持つ「他者性」と「両義性」を保持し続けるがためにさらなる周縁へと向かっていく「弱さ」を秘めるものだが、その一方でこれら身体の「他者性」と「両義性」という性質はただ無力であるばかりではなく、二項対立的発想に基づいて人々に規範への服従を迫るものとしての教条主義に対する政治的批判性を内包し、主人公の行動にこうした批判性を意味づけるものとしてもある。本論文では、後続の作品になるにつれ段階的に進展していくこの批判性の特質を、章ごとにそれぞれ概念化し定義することを試みる。

本論文の問題意識や目的、対象と方法などを明らかにした序論に続く第一章では、作品

分析の前提情報を提供するため、ピニェーラとアレナスの生涯および作品についての概観をおこなう。特に、革命政府の文化政策との関わりや両者の関係性を中心に記述することで、それぞれの作者および作品を取り巻く歴史的な脈を理解する一助となることを目指す。

第二章では、ピニェーラの第一長編『レネーの肉』および「ペンタゴニア」の第一作目・二作目となる『夜明け前のセレスティノー』『純白のスキャンクたちの宮殿』を対象に、各主人公における身体の「他者性」と「両義性」という二つの主題を抽出し、次章以降において同主題の発展を追う前提を確認する。

二つの主題のうち、身体の「他者性」は、「自分自身でありながら異なる他者でもある性質」あるいは「自分以外のものとして客観化・対象化されうる性質」として定義される。第二章では主人公がこの性質を通じて外界に他者としての自己像を見だし、他者の苦悩に同一化する回路を見出していく過程を明らかにした。他者への回路としての身体の「他者性」は、続く第三章での分析対象であるピニェーラの第二長編『ちっぽけな演習』や、ペンタゴニア第三作『ふたたび海』においてさらに主題的発展を遂げる。抑圧的教条主義がより一層強まり、人々が仮面を被りながら生きざるを得ない世界を描く両作品では、周縁者としての自己意識を強める主人公は身体の「他者性」に導かれ、自分と同じような「周縁者たち」の隠された素顔を発見し、その集合的な「物語=歴史」を発見するに至るのである。またそれは同時に、そうした「物語=歴史」の「目撃者=読み手」から「証言者=語り手」としての自己意識を強めていく主人公に、物語や芸術という表現手段を媒介として「いま、ここ」ではない想像の場を夢想させるものでもある。このユートピア的な「想像の場」こそは、物語によるコミュニケーション行為を通して「いま、ここ」を離れた他者の存在を感知し、身体における「他者性」を惹起することで現実の相対化と批判をもたらすという意味で、閉じた体系としての教条主義に対する批判力を内在させるモデルであり得ている。

一方、「他者性」と表裏一体の概念でもある身体の「両義性」は、第二章において「互いに相矛盾する異質な要素を含み持ち、しばしば二項対立的分類に対して決定不可能性を示す性質」として抽出される。この性質もまた第三章の分析対象においてさらに顕著となり、以下に挙げる三つの政治批判性を露わにする。すなわち、生の多様性に基礎を置く教条への「原理的批判性」と、矛盾と逆説という形式によって示唆される「認識論的批判性」、そして自分自身と自らが語る物語自体に対しても発揮される「自己言及的批判性」である。特に、逆説的な主体の在り方と自己言及的批判性は、究極的には不可能であることを自覚しながらも身体上・言語上の逃走を繰り返してつねに教条的定義を逸脱し、最終的には自分自身にさえ教条へ転化する危険性を見出し批判の矛先を向けるような運動につながっていく。第三章の結論では、身体の「他者性」と「両義性」に基づくこの運動に「定位されざる逆説的遁走」という独自の用語を与え、これをピニェーラとアレナスの長編作品に共通する基層主題であり、両者のテキスト生成の原理でもあるものとして定義する。続く第

第四章・第五章では、この「定位されざる逆説的遁走」という概念が、後続の作品群において、それぞれ特殊な形で発現していることを論じることに主眼が置かれる。

第四章では、それぞれにディストピア小説との共通項を持つピニェーラの第三長編『圧力とダイヤモンド』およびペンタゴニア第五作『襲撃』の比較分析をおこなう。極度に全体主義的な物語世界を描く両作品では、人々の身体あるいは言語的権能は著しく制限されており、彼らの主体性の存立や相互関係の樹立自体がきわめて困難なものとなっている。両作の主人公は物語中ではほぼ唯一、身体と言語の機能を保持し、それゆえ主体性を保つ人物として現れてくるが、周囲の人間たちとの関係が失われた社会にあって、彼が保持する「他者性」は他者への回路として展開する条件を持たない。また、二項対立的規範の一方が絶対的な価値を帯びる全体主義的社会においては、彼の身体が保持する「両義性」もまた、二項対立のどちらでもあり得るような曖昧な在り方を許されていない。このような理由から、『圧力とダイヤモンド』の主人公は退行へと向かう全体主義的社会にただ一人「抵抗する主体」として、一方『襲撃』の主人公は、絶対的独裁国家にどこまでも「服従する主体」として、それぞれ一枚岩的な主体性を保有しているようにまずは映る。

しかし両主人公は同時に、前作までの主人公像、あるいは当該作品内部での主人公像を逆転したような主体として現れてくるのでもある。すなわち、『圧力とダイヤモンド』の主人公は、前作までの主人公の属性であり、本作では社会全体が従う規範と化した「逃走」をいまや拒絶する側に回っている。一方の『襲撃』の主人公は、徹底的に前作までの主人公像とは対照的な「服従する主体」であるにもかかわらず、結末において唐突に独裁国家を転覆し、一瞬にして服従と抵抗のどちらに与しているとも決定不可能な、いわば二重に逆転された主人公像として立ち現れる。両作品ではともに、前作までに自ら語り継いできた主人公像を（『襲撃』については作品内部において二重に）逆転させるという、きわめてメタ的かつアイロニカルな形での「定位されざる逆説的遁走」の変奏が認められるのである。

「怖れ」を秘めるがゆえに、最終的に規範としての全体主義に同化することがない主人公の姿が、ある視点から見れば過去に築かれてきた主体像を自ら転覆させているという事実は、自分自身さえ教条に転じるものと捉える「自己言及的批判性」が極端に敷衍された結果に他ならない。身体性が制限され、「他者性」と「両義性」が発露しがたい社会を描きながら、それでもなお（『圧力とダイヤモンド』の場合には「人生」という概念、『襲撃』の場合には母親への愛憎関係に体现される）身体的原理に基づくことで逆転を生み出している事実こそ、両作品が単なるディストピア小説の概念を超えて含み持つ政治的批判性が看取される。

第五章では、これまでの比較分析の成果を敷衍させることで、例外的にペンタゴニア第四作『夏の色』のみを分析の対象に据える。アレナスに特徴的な文学的特質が十全なまで

に開花し、ピニエーラ作品との共通項をほとんど論じられてこなかった本作では、祝祭的で乱交的な物語空間において主人公のみならずほとんどすべての登場人物に過剰なまでの身体性と声が付与され、ピニエーラの長編作品群にも観察される性質であった「他者性」と「両義性」もまた過剰なまでの発露を見る。本章では、特にアレナス作品に独自のものとして強調されやすい「性」と「笑い」の特質を、もはや主人公の身体にとどまらず小説そのものの動力である「テキストの主体」によって表象される「他者性」と「両義性」とにそれぞれ関連づける。そのことによって、「無境界化の原理」としての「性」の在り方、あるいは革命政府の公式言説を転覆するのみならず自分自身を含むあらゆる権威に対しての逆説的視点を内包する「笑い」の位相を確認し、これらの要素がふたたび、政治的批判性を内在させる「定位されざる逆説的遁走」の集合的で特異な現れとしてあることが明らかとなる。こうした分析において、すぐれてアレナス独自の小説とみなされる『夏の色』、特にその中核をなす「性」と「笑い」という二つの主題は、その基層の性質において、アレナスの先行作品のみならずピニエーラの長編作品とも主題的連続性を持っていることが了解されるのである。

結論部では以上の議論を総括するとともに、ピニエーラやアレナスの作品に一貫する「定位されざる逆説的遁走」とその政治的批判性について、先行研究との関連を踏まえてさらなる考察を深め、あらためて本論文の主張を位置づけることを試みる。